

すぎのこ



幼保連携型認定こども園
尚綱大学附属こども園

「僕には鳥の言葉がわかる」と乳幼児教育・保育

「僕には鳥の言葉がわかる」という本を親戚の勧めで読んでみました。「書店員が選ぶノンフィクション大賞2025」など書かれた本の帯にも惹かれま



ダンゴムシ
ヤバッタ、クワ
ガタなどが幼

少期から好きでプラケースなどで飼ってその生き物たちをじっくりと見つめながら「彼らはどういうふうに見えるのか」「この世界を見ているのだろうか?」などと想像するのが好きだった著者の鈴木俊貴さんは、高校でバードウオツチングにはまって、研究の道に進んでいきます。

大学生になったある冬、軽井沢の森でコガラがいつもと違って「ディーディー」と甘えたよう



づきさえすれば「ヒヒー」という鳴き声で、みんなが草木の茂みへと逃げられるのです。

それから二〇年にわたる鈴木さんは主にシジュウカラを調査対象にして、調べ続けます。ワクワクするような新発見の連続でした。そしてシジュウカラの鳴き声の一つ一つには意味があり、鳴き

声を組み合わせて「警戒して(ピーツピ)、集まれ(チチチチ)」というような文まで作ることが出来ることを発見します。鳥には鳥の言葉があり、人間の言葉は動物の言葉の一つに過ぎないことを確信します。古代ギリシャ時代から現代まで言葉を持つのは人間だけだと決めつけられてきたことを覆したのです。そして「動物言語学」という新しい分野を創設したのです。

この本の魅力は単なる「鳥の研究」ではないところです。鈴木さんは、「小さな違和感を見逃さない」「じつと観察する」「本当にそうかな?と考える」「相手の世界を理解しようとする」という姿勢を、長い年月をかけて続けています。

これは、乳幼児教育・保育としても深くつながっています。子どもはまだ言葉が少なくて、行動そのものが「ことば」になっています。泣く、笑う、走る、靴を投げる、先生や親にまとわりつく、急に黙る、虫をずつと見る、同じ遊びを繰り返す……そういう姿の中に、その子なりの意味があります。言葉にならない形でたくさんさんのメッセージを出しています。

また、同じ「泣く」でも、寂しい、悔しい、不安、疲れた、甘えたい、わかっているけど、実は全部違うこととがあります。でも大人が忙しかたり、「また泣いている」で終わってしまったらすると、その奥にある気持ちには届きにくくなります。乳幼児教育・保育では、その行動を「困った行動」で終わらせず、「この子は何を伝えたいんだろう」と受け止めようとするのが、とても大切だと思います。どうしてこんなことをするの?」ではなく、「何を伝えようとしているんだろう」と考えるだけで、保育の空気が柔らかくなる

ことがあります。そして、子どもは「自分をわかってもらう」として「自分を感じると、安心して育っているのだ」と思います。自然の中で

鳥や虫を見つめる経験も、実はその「感じ取る力」を育てているのかもしれないですね。

鈴木俊貴さんの研究は、最初は周囲から「鳥の鳴き声に興味なんであるのか」と見られていたようですが、それでも丁寧に観察を重ね、「相手には相手の世界がある」と信じ続けたところが大きかったのだと思います。

鳥の声を「ただの鳴き声」で終わらせない視点と、子どもの行動を「ただのいたずら」で終わらせない視点は、かなり似ていると思います。特に尚綱こども園は自然豊かな園です。虫や鳥、草花との出会いがあります。その中で、「あ、鳥が鳴いた」「この虫はどこへ行くのかな」「なんて葉っぱが落ちるんだろう」と感じる経験は、「観察する心」や「他者を理解する心」を育てます。

この「僕には鳥の言葉がわかる」の本は「鳥の本」と同時に、相手の世界を想像する力の本だと思えます。それは乳幼児教育・保育の根っこにある、共感、好奇心、対話、自然へのまなざしと深くつながっているように感じます。